



Aokid × 西井夕紀子 × 涌田悠

「ひとつととととソ」 つくったうたたち

かじ
齧った

作詞・作曲 西井夕紀子
原案の川柳 涌田悠

Aokid

西井夕紀子

たまご さんど
さんかく たまごさんどを

さんにな ならべて
さんみやくを つくったよ

たまご さんど ならべた
ならべた その かたちは
わたし たちの ギザギザの
あくしゅ

ギザギザ を ^{りょうせん}稜線とよびます
かじ齧るって 漢字は 難しい

ギザギザ を ^{りょうせん}稜線とよびます
かじ齧るって 漢字は 難しい

たまご さんど
さんかく たまごさんどを

さんにな ならべて
さんみやくを つくったよ

たまご さんど 齧った
齧られた その 跡は
わたし たちの ギザギザの
はがた

ギザギザ を ^{りょうせん}稜線とよびます
かじ齧るって 漢字は 難しい

ギザギザ を ^{りょうせん}稜線とよびます
かじ齧るって 漢字は 難しい

チヤゲ& ASKAと言えは この曲だ
街や人が何度でも線をひく
空や山のことは向こうでも思った
ふりむくと サザンクロスが ひかれてた
むこうから やってくるからだ がひこうき

電車さる 髪揺れてまた 会えそうで
鳴き声の同じあの鳥 旅先に
はなれても引くちからあり 同じ距離
おとだけを聞いていたくて ほんとうは
何もかも しゃべってる街 人あらず
いしころに合わす足まだ 生きている

街のうた

靴紐を結べば近づく地球かな
 青年の肩が切り取る秋の雲
 吊革のすべての指に血は泳ぐ
 地下をゆく二足歩行の魚たち
 垂直に走ってみせて熱海行き
 前髪を川の光に触らせて
 陽を纏う指がページをめくり、冬
 街を鳴らす行き先不明の足音よ
 ネクターを飲み干す顔に映る月
 シマウマの四肢引っこ抜く水溜まり
 襟の釦忘れっぱなしで会いたいな
 サンマルクにあなたの鱗、落ちていた
 おじさんのアキレス腱が冬を裂く
 鳩尾のアパートにもら、せんかいだん
 俯せのアンパンマンが動かない
 長ネギが落ちてる星のアスファルト
 仏具屋のおじいさんと鳩、待ち合わせ
 らーめんの伸ばし棒に吹く春の風
 まばたきでベランダのシャツ踊らせて
 春の空にガリガリ君が突き刺さる
 飛行機と鳥が重なる距離が空

山のうた

海底を黙って歩く 風は樹の手足を洗うだれのうたごえ
 虫喰いの葉陰が編んだレース踏む
 死んでゆくすずめの膝の鋭角よ
 フォカッチャのような岩壁登らせて
 足首に蜘蛛の巣ひかる磨崖仏まがいぶつ
 山腹の捏ねる背中はパン生地に
 稜線を齧れば卵サンドかな
 京急の窓はみ出して山帰り
 真っ直ぐになりたくないわ足の裏
 少年の球待ち苔の生す右手
 かもめどこまでがうみなの 遠い春の胸の汀のテニスボールの
 8万年後の地層を進むナゲットのバーベキューソースの空箱踏んで
 この星ごと殴る嵐の中に立つ鳥 たましいのはだかのかたち
 絶島に取り残されて少女らの睫毛、嵐を突き抜けてゆく
 潮風と坂を下れば右の手のかたちはうまれたばかりのほしの
 弟は泳ぎ疲れて夕焼けの零したなみだの色に染まった
 化粧ポーチの暗闇に鳴るアイシャドウの角と貝殻たちの合奏
 海鳴りをはらんで眠る姉さんのピアスの色を思い出せない
 岩肌に倣ってうたう肋骨で駅のホームに海岸を生む
 水平線をなぞった爪を折り畳みあなたに文字を送る地下鉄
 いつかうみになるからきてね 砂浜と踊るあなたの軌跡は手紙
 どこからきたのかわすれてみたい 流木に座って立ち上がるまでの千年
 ひとととどどこまでがかぜですかうみですかあなたのうたですか

